

【聖書】

ルカ 11:29 群衆の数がますます増えてきたので、イエスは話し始められた。「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。30 つまり、ヨナがニネベの人々に対してしるしとなったように、人の子も今の時代の者たちに対してしるしとなる。31 南の国の女王は、裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまसारものがある。32 また、ニネベの人々は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまसारものがある。」

1 復習

先々週 10/13 は、28 節までを読みました。今日はその続きです。少し振り返ります。主イエスはある人から「口を利けなくする悪霊」を追い出しました。その業を見ていたある人々は、「悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と中傷しました。また、「イエスを試そうとして、天からのしるしを求め」るような人々もいました。そんな非難に対して、イエスさまは見事に反論されましたが、その過程で次のようにおっしゃいました。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」父なる神の支配が私達の所に既に来ており、手を伸ばせば、父なる神のみ力の内に生きることができる、心に刻みたい主のみ言葉です。イエス様は、その後私達を神から引き離す悪霊の支配について語られました。そして、最後に「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」とおっしゃいました。単に聞くだけでなく、神の言葉に生きる時にこそ、私たちは神の国の中を生きることが出来る…ということです。

2 群衆が集まる

さて、そうこうしている内に、「群衆の数がますます増えて」きました。「ますます増えて」というギリシャ語は、聖書ではここだけしか使われていない、とても強い言葉だと言われています。どんどん、みるみる間に人々が集まってきた。どうして集まってきたのでしょうか？彼らはイエス様が「天からのしるし」を見せるのではないかと期待していたからです。神の力が働いているのだとはっきりと分かる奇跡を人々は期待して集まってきたのでしょうか。そこには、「自分たち

が驚くべき業をすれば、あなたを神の子であると信じてやってもいい」という思いがあります。

自分達が神を評価し判定し、楽しむ。それは神への態度ではない、全知全能であり創造主であり裁き主であるという神への畏れはありません。自分達が一番となり、判定して楽しもうとする、神を自分達の都合のよいものにしたい…そんな人間の欲望が大波のようになって、イエスさまめがけて押し寄せてきているようです。

主イエスは、みるみる間に膨れ上がる群衆を遮るように仰います。「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがる」—自分達が神となり、まことの神に身分証明である「しるし」を欲しがる…逆転した「今の時代」は「よこしまだ」と言って、正面から対決されるのです。それは主イエスが生きた時代だけではありません。現代を生きる私達の時代でもあります。人々は自分達の造り出す神ならぬものを神とし、利用しようとするのです。それはこの日本の現状を見れば、よくわかる事ではないでしょうか。

3 ヨナのしるし

しかし、主はきっぱりと人々の欲望に否と仰います。「ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない。つまり、ヨナがニネベの人々に対してしるしとなったように、人の子も今の時代の者たちに対してしるしとなる。」と。

「ヨナ書」は短くて楽しく知恵に満ちた物語ですから、まだ読んだことのない方は是非お読みください。大筋はこういうものです。ヨナという預言者が、神さまからとんでもない命令を受ける。自分の国・イスラエルを武力で圧迫し苦しめている大帝国アッシリア、その首都ニネベに行って、預言しなさいという命令です。彼は、絶対にそんなことをしたくはなかったので、船に乗りこみアッシリアのある東と正反対の西へ西へと逃げ出します。神は嵐を起こされたので、ヨナの乗った船は今にも沈みそうです。ヨナは同じ船に乗っている人に、「この嵐はわたしのせいだから、私を海に投げ入れろ。そうすれば嵐はやむ」と言って海に投げ入れさせます。「敵であるアッシリア帝国に言って預言するよりも死んだほうがましだ！」とヨナはどこまでも頑なに神の命令を拒むのです。しかし、海の底にも神はいらっしゃいます。神さまはヨナを大きな魚に飲み込ませ、三日三晩を過ごさせます。ついにヨナは大きな魚の腹の中、真っ暗な闇の中で神に向かって祈ります。「苦難の中から私が主を呼びかけると、主は答えてくださった。陰府の底から主に叫ぶと、私の声を聞いてくださった。」ヨナはここで神に向かって叫びをあげます。そして不思議な事ですが、叫びを上げるとともに、自分の声を神が聞き届けられている事を確信することができたのです。だから彼は神に感謝の祈りをささげそして、「私はあなたにいけに

えをささげ、誓いを果たそう。救いは主にこそある」とする事ができました。不思議な事です、信仰者のリアルな体験でもあります。主が仰る「ヨナのしるし」の一つと言えます。

しかし、それだけではありません。魚は三日目にヨナを陸地に吐き出します。ヨナは、ニネベに行き、神様がおっしゃった通り、「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる」と呼ばわって歩き回りました。ヨナの心の内には、奢り高ぶっているニネベの人々が、小さい国の民である自分の言葉を聞いて罪を悔い改めるとは到底思えなかったでしょう。「お前は一体自分を何者だと思っているのだ。お前たちの神など怖くもなんともないわ。さっさと帰れ」と嘲笑されると思っていたのです。しかし、なんとあろうことか、ヨナの言葉を聞いたアッシリアの王は、「人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ」と言って罪を悔い改めました。ニネベの都の人々も同様でした。神様はその様を見て「宣告した災いをくださのをやめられた」と聖書は伝えます。ヨナは神がアッシリアの民を許したのを知り、神様に腹を立てます。「話が違う」と。しかし、神は仰います。「アッシリアの都ニネベにいる十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と無数の家畜を惜しむのは当然ではないか」とヨナを諭されるのです。主イエスが「ヨナのしるし」だと仰る所以はここにあるのだと思います。どんな人間であろうとも、ご自身のもとに立ち帰る者を神はお赦しになり、父なる神として振舞われる、ヨナの物語はそのような神を指し示しています。

4 地の果てから来た女王

主イエスはもう一つ旧約聖書の事例を挙げます。シェバという南の国の女王が「ソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来た」という出来事です。「南の国」とは、アラビア半島の南端、今のイエメン辺りだと言われています。それはイスラエルの首都エルサレムから見れば、まさに「地の果て」です。その「地の果て」から「ソロモンの知恵」を聞くために、はるばる女王がやって来た。それは「神の言葉」を聞くために来たということです。

ソロモンは、王として立てられる時に、「何でも望むものを与えるから言ってみなさい」と神が仰った時、ソロモンは長寿や富ではなく、「善と悪を判断することができるように」「聴き分ける心をお与えください」と願いました。彼は、イスラエルを「神の国」とするために必要な「神の知恵」を求めたのです。神はその願いに応えられ、彼に深い知恵を与えてくださいました。だから、彼の王国は栄えに栄え、ソロモンの名声は「地の果て」まで広がりました。その名声を聞いてやって来た南の国の女王は、ソロモンの言葉を聞いた後、「あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように」と言って主なる神様を賛美します。ソロモンではなく、ソロモンに知恵を

与えた神を賛美します。「神の知恵」とは、「神の言葉」ともいえるでしょう。ソロモンは、数々の難問にあたる度に神からの言葉を通じて知恵を与えられました。南の国の女王が慕い、万里を超えてやってくるほどの知恵でした。これが「ソロモンのしるし」です。

5 神のしるし

ヨナのしるし、ソロモンのしるしを見てみると、まことの「しるし」とは、神がどのようなお方であるか？ということを示すもののようです。言葉を変えれば、「神が神であられること」をさし示すもの、それが「しるし」と言えるのではないのでしょうか。聖書の語る「神」は、私達の造り主であり、私達とは次元の異なるお方です。私達の言葉では、「神」が神である事を説明しきる事など到底できる筈ありません。ただ、神がどのような方であるかを指し示すことができるのみです。それ以上のことは、私達が神ならぬものを神として造り上げる偶像礼拝への道を開くことになるのだと思います。だから主は、「今の時代の者たちはよこしまだ。(中略)南の国の女王は、裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう」とおっしゃるのです。

6 神の本領

「しるし」とは、神が神であることを指し示すもの。言葉を変えれば神が最もその本領を発揮されるところを指し示すこととも言えます。そう考えている時、先週の休暇の時に行った教会で礼拝説教の中で語られた話を思い出しました。受難週での祈祷会での話です。その教会では、主イエスの十字架をしのぶ受難週には毎日、祈祷会がもたれており、そこでは牧師が語るのではなく、信徒が主イエスのご受難について信仰を励ます話—奨励を行っているそうです。ある女性信徒が奨励の当番であった日。彼女は次のように話し始めたそうです。「私は、神が神であられる事とはどういうことかを話します。」そしてそのまま、その日与えられていた福音書の主イエスのご受難の記事を説き始めました。大きな声でも何でも無い、静かな、しかしきっぱりとした声で。

主イエスの十字架の出来事というのは、当時の大きな帝国であったローマ帝国の属領で起こったことですが、決してローマ帝国の歴史の中に大きく記されている事件ではありません。大帝国の属国の片隅で、一人の男が、当時の支配者からも民衆からも排斥され偽預言者、反逆者とののしられ、不当な裁判で十字架にかけられ惨殺された…という話です。まだ若いのに死刑になった、それだけのことだ…とも言えるのです。しかし、その「それだけ」の出来事こそ、私達の救いの出来事、ここに神の本領が現れている！女性

は静かにきっぱりとそう言い切ったのです。十字架と復活の主イエスにこそ、神が神であられる事が現れている、神の本領が現れているとも言えます。それは真実であると思います。

7 森有正

では、そのような神と私達はどこで出会うのか。森有正というクリスチャンの哲学者がいます。パスカル研究で著名な方だそうですが、留学先で妻以外の女性と暮らし始め日本に戻って来なかった…というスキャンダルが世間を騒がせたようです。内心の懊悩が深かったのだろうと推測します。この森先生はアブラハムがお好きで、アブラハムに関する著書の中で次のように言っているそうです。「人間というものはどうしても人に知らせることのできない心の一隅を持っています。醜い考えがありますし、また秘密を抱えたり、また密かな欲望がありますし、恥がありますし、どうも他人に知らせることができない、ある心の一隅というものがあり、そういう場所でアブラハムは神様にお目にかかっている。そこでしか、神様にお目にかかる場所は人間にはない。人間が誰はばからずしゃべることのできる観念や思想や道徳やそういうところで人間は誰も神様に会うことができない。人にも言えず、親にも言えず、先生にも言えず、自分だけで悩んでいる、また恥じている。そこでしか人間は、神様に会うことはできない。」聖書の神というのは、人には決して言えない、私達自身が目をそむけたくなる心の深い部分、闇の部分で、私達と出会ってくださる方であると、森有正先生は語るのです。それは本当だと私も思います。森先生自身、深く苦しみ恥じ悩んだ。そしてそこで神と出会った…ヨナが深い海の底の大魚の腹の中で出会ったように。しかし、ヨナのしるしにまさるものに森先生は出会って救われたのではないかと思います。主イエスご自身です。私達自身が認めたくないような深い所に十字架と復活の主が下りて来て下さり、そこから私達を造り変えてくださるという事を体験された。これこそ、なにものにもまさるしるしではないかと思います。だから、主は仰るのです。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」

口を利けなくする悪霊に取りつかれていた人の苦しみは察するに余りあります。言葉をしゃべることが出来ない。文字が書けない人が多かった時代には、言葉をしゃべることができないのは、人との交わりを持てないことを意味しますし、差別の対象になります。ユダヤ人社会の中では、罪人のレッテルを貼られることでもありました。そんな二重三重の苦しみを生きており、そうであるが故に必死になって救いを求めている人をイエス様は憐れみ、深い淵まで下りて行って、「神の指」を伸ばして救ってくださったのです。それは、罪人として人々から排除された人を神の国に招き入れる救いの業でした。「ソロモンの知

恵」がもたらしたイスラエル王国にまさるものが今、「神の指」の業でもたらされている。ヨナが語った「神の言葉」にまさる言葉が、今語られています。

8 犯罪者の悔い改め

しかし、イエスさまの言葉を聞いても、御業を見ても、神に立ち帰り悔い改める者は多くありませんでした。その結果、イエス様は十字架に磔にされることになるのです。ですが、なんと、そこでも、主イエスは祈ってくださいました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と。この十字架に「天からのしるし」を見ることが出来た人間がいました。死に値する罪を犯してイエス様の隣の十字架に磔にされた男です。彼は、十字架の上で絶望しつつ苦しみ悶えながら死につつありました。しかし、そんな自分の隣で罪人の罪の赦しのために祈りつつ死んでいかれるイエス様の姿を見、その祈りの言葉を聞いた時、父なる神がどのようなお方であるかを見たのです、知ったのです。救いを見た。そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と願いました。いえ、祈ったのです。十字架から下ろしてくれと頼んだものではありません、自分の罪を赦して欲しい、神のみ国へと迎え入れて欲しいと祈ったのです。主は答えられます。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」—ここにソロモンやヨナの「しるし」にまさる確かなしるしがあります。

9 進みゆく神の国

そのような死を超える希望、イエス・キリストを私達は宣べ伝えています。先ほど賛美した「神は我がやぐら」—宗教改革者マルティン・ルターの歌ですが、その4節にはこうあります。「くらきの力、よし防ぐとも、主の御言葉こそ、進みに進め。」

神の御言葉は、あらゆる壁を打ち破り進んでいく、神から引き離す力、悪霊の力、私たちに働きかけ神ならぬものを作り出させようとする力が作り出す隔ての壁を神の言葉は打ち破って広がっていくのです。南の国の女王が「ソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たから」ように。また、大帝国アッシリアの栄華、人の世の富を享受しておごり高ぶっていたアッシリア王やニネベの民が、小国の貧しい風体の男の一言「あと四十日すればニネベの都は滅びる」という預言の言葉を受け入れ、「ヨナの説教を聞いて悔い改めた」ように。

10 あらゆる国の人々に宣べ伝えられる

十字架の死から三日目に永遠の命へと復活されたイエス様は、四十日にわたって弟子たちに「神の国について話され」た後、イエス様は天に上げられることとなります。その直前に弟子たちにこうおっしゃいました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

「地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」この約束の言葉は実現しました。この日から十日経ったペンテコステの日に、弟子たちに聖霊が降り、弟子達はエルサレムから「地の果て」まで出かけていき「あらゆる国の人々に」「イエス・キリストの名によって」与えられる「罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝えていきました。「神の言葉」は、イスラエル、つまり信仰共同体の外へと伝えられていき、神の民でない者達が父なる神を知り、そのもとに立ち帰り、悔い改める。そのようにして神の国、「ヨナにまさるもの」「ソロモンにまさるもの」は私たちの所に今やって来ました。この横浜ナザレン教会です。私は今日も、二千年間、主イエスの弟子達が語ってきた同じ福音を語っています。神の憐みにより生かされていれば、来週も語ります。そして皆さんは今日も神の祝福を受け、それぞれの場所に遣わされ、主イエスを証し伝道するのです。そこにヨナにまさるもの、ソロモンにまさるものがあります。信仰においてイエス・キリストと共に生き、イエス・キリストを証し、その証を聞いた人々が「天からのしるし」を見て、神に立ち帰り、イエス・キリストを信じて賛美をささげる時、そこに神の国が到来しているから、そこが神の国の最前線だからです。私たちは、神様の憐れみによってその神の国に招き入れられ、そして他の人々を招くために、神の国に生かされています。ニネベの民よりも南の国の女王よりも幸いな者とされています。父なる神を賛美せずにはられません。